

まじめな公務員

国家公務員とは？

高い給与をもらいながら、都心の一等地にある家賃の安い官舎に住み、多額の退職金をもらっているのに天を下りを繰り返して、税金の無駄遣いをしている。

では、国土交通省とは？

特別会計を含め10兆円の予算を持ち、日本中に出入機関を抱え、諸悪の根源のようにも言われる公共仕事を管轄し、建設会社と一緒に官製談合をしたこともある。

普天間問題がこじれて辞任した辻元前副大臣は、国土交通省のことを「利権の巣窟だと思っていた」と言っていたが、国民の感想もあまり変わらないのかもしれない。そんな「極悪人の集まり」のような国土交通省を取材する記者として、国土交通省の職員に対して抱いているイメージは「まじめ」。

まじめはいいことなのか？悪いことなのか？

例えば「八ツ場ダム」。半世紀も前に持ち上がった計画は、いまだ完成

せず、昨年の政権交代により「ダムは必要なのか」という原則に立ち戻ってしまった。一般論で言えば「ダムは要らないのではないか」と思っている。局地的な豪雨が増えているのに、山間地に作られたダムが、どれだけ平野部の洪水を防いでくれるのか？節水型のエコ社会に変わり、高度経済成長期のような水不足はあまり想定できない。なのに、なぜ、八ツ場ダム事業は今まで続いてきたのだろうか？終戦直後、カスリーン台風の惨禍を目の当たりにして決めた計画を、地元の反対も押し切って強引に進めてきた。関係自治体も必要性を主張しているし、中止するわけにはいかなかった。なぜなら「ダムは必要だ」と、まじめに信じてきたからだ。

記者として国土交通省の職員の方を取材していると「頭もいいし、性格も穏やかで、本当にいい人なんだ

けどなあ…」と感じることが多い。それなのに、公務員に対する世論の評価は、なぜかすこぶる悪い。「公僕」として、国民のためを思い、決められたことを熱心に、忠実に実行する。素晴らしいことなのに、どうして公務員のイメージは、悪いのだろうか。

その原因は「まじめ」だからだと思う。自分たちがやっていることは、

天下りではなく再就職であり、無駄遣いではなく社会サービスである。自分たちが「間違ったことをしている」なんて、夢にも思わないし、心の底から「正しいことをしている」とまじめに信じて、業務を遂行している。実際、公務員のみなさんに、悪気はないようだ。たまに、それが「間違っていること」であり「悪いこと」であっても、そうとは思っていないようだ。その現実には気付いて欲しいのだけど、気付かない。気付いていても、なかなか変わらない。「まじめ」って恐ろしいなあ…。

そんな私も、実は、公務員の息子だ。妻には「公務員に向いているよね」とか「考え方が公務員みたい」と良く言われる。「正しいことをしているんだから、いいじゃないか！」強く否定してみたりするが、でも、そうらしい。

